

授業省察における ICT の効果的な活用方法についての一考察 —英語科授業実践における一取組—

喜多容子*

本研究は、学生が、授業省察過程を重視することにより、授業改善への意欲向上にどのような波及効果を及ぼすかについて、ICT の効果的な活用を基に授業実践を行い、その結果を考察することを目的とする。ICT の活用において、授業省察記録については、Moodle と Forms の 2 チャンネルの送付方法を用い、模擬授業省察については、タブレットやスマートフォンの映像転送機能によるビデオクリップの送付方法を用いる。

[キーワード：授業省察，ICT，Moodle，Forms]

1. はじめに

外国語教育に携わる教員を目指す学生にとっては、英語科教育論等で修得した知識を、実際にマイクロ・ティーチング等において授業実践することが重要であると考えられる。本研究で取り上げる英語科教育論は、英語科授業をより発展的に実践するための英語指導方法に加え、校種間の連携について理解し、英語科授業に関する高度な視野を獲得することを目的としている。一方、初等中等教科教育実践は、英語科授業を展開するために必要な基礎的・基本的な理論と実践の技術・方法に関する理解を深めることを目的としている。さらに、教職実践演習は、学生が、3 年次までに修得してきた知識・技能を、教員として必要な資質・能力として有機的に統合・形成させることを目的としている。様々な角度からのアプローチにより、指導力向上を目指すのである。これらのコースにはマイクロ・ティーチングが導入されている。その歴史は古く、1960 年代にアメリカで考案され(Allen, 1966)、その後、現在に至るまで広く教育現場にて活用されている。

また、授業実践とあわせて重視すべきこととして、授業省察・内省的考察があると考えられる。柏崎(2009)は、教師に求められる省察の力を指摘し、さらに、省察の基礎力育成のための取り組みについて、その過程におけるメタ認知の重要性に言及している。そこで、筆者は、授業省察・内省的考察の過程を重視させることが、授業力向上に繋がるものと推察し、授業省察過程の在り方についても検討する。ただ、藤村(2016)が指摘するように、授業記録の活用方法

の工夫についても検討が必要であると考えられる。模擬授業後は、質疑応答を含む意見交換によるピア・フィードバックを実施する。併せて、授業省察を Moodle に記入させたり、内省を Forms で送付させたりすることにより、学生の振り返り活動を意識化させる。授業者が、授業省察過程において、友達からのフィードバックを受け取り、自身の授業実践ビデオを観察することで、授業者の内省を促し、授業力の向上につながると考えられる。生内(2018)は、ピア・フィードバックの有効性について、振り返り活動の意識化と深化に寄与することに言及している。

2. 目的

本研究では、授業における効果的な ICT 活用を模索するために、ICT を活用したピア・フィードバックを取り上げ、授業省察過程の重要性を学生に意識させることが、授業改善への意欲向上に与える効果について考察することを目的とする。

3. 方法

3.1 調査期間と調査対象

調査期間は、2019 年 4 月から 2020 年 1 月である。

本調査対象は、本学の初等中等教科教育実践、英語科教育論Ⅳ及び教職実践演習を受講する学部生と大学院生とした。

初等中等教科教育実践の人数構成は、英語教育専攻学生 8 名と、学校教育・特別支援教育専攻学生 5 名の計 13 名である。

英語科教育論Ⅳの人数構成は、小学校英語科教育専修学生 2 名、中学校英語科教育専修学生 4 名の計 6 名である。

* 鳴門教育大学 大学院 高度学校教育実践専攻 言語・社会系教科実践高度化コース

教職実践演習の人数構成は、英語教育専攻の学部生8名と院生1名の計9名である。なお、英語教育専攻学生は、2019年9月に、鳴門教育大学附属小学校・中学校での教育実習(4週間)で、外国語学習の授業実践を経験している。

3.2 実施内容

授業観察は、DVDや英語教育情報誌の「AR」画像を活用し、スマートフォンやタブレットで、各自が観察したい校種や授業実践例・場面を選択し、自由に視聴できるようにした。特に、授業観察における「気づき」を意識化させた。なお、「AR」を活用した授業観察の有効性(喜多, 2019)に基づき、本年度も引き続き「AR」を活用するものとする。

マイクロ・ティーチングでは、個別の模擬授業に加え、小学校英語科教育専修学生と中学校英語科教育専修学生がペアとなり、自分たちがデザインしたICT教材を活用したチームティーチングでの模擬授業も実施した(図1)。

授業者の内省を促すため、模擬授業の様子をタブレットで撮影し、全体での振り返り活動後に、授業者のタブレットやスマートフォンに送付した。講義や模擬授業について、「学習への気づき・振り返り」をFormsで送付させたり、Moodleに記入させたりすることでディスカッションに参加させた。回答方式は詳細な記述を可能とする自由記述方式を用いた。

3.3 2チャンネルの授業省察過程活用について

本研究における授業省察過程においては、MoodleとFormsの2チャンネルの投稿・送付方法を使用した。Moodleは全員参加型のディスカッションパネルの役割があり、学生がそれぞれの授業省察に対し意見を述べたり、教員も助言等も投稿できたりするため、オープンチャンネルとしての活用が可能である(図2)。

一方で、Formsは、投稿・送付された授業省察を



図1. マイクロ・ティーチングの様子

閲覧できるのは教員だけであるため、学生と教員のプライベートチャンネルとして使用が可能である(図3)。このように、2チャンネルの授業省察過程方法を使用する理由としては、前期コースにてMoodleのみを使用した際に、挙げられた意見に基づくものである。一部の学生は、授業内で発言を躊躇した意見等を、教員と率直に交換できる場として、プライベートチャンネルとしてのFormsの使用を希望した。

4. 結果

4.1 Moodleを活用した授業省察とフィードバックについて

まず、「AR」を活用した授業観察過程において、学生が、授業内容に関し、自分が参考としたい取組等について、意見交換を行う様子が見られた。次に、模擬授業後の授業省察過程においては、ピア・フィードバックが積極的に行われていた。Moodleに、投稿された各自の授業省察については、授業に参加して参考になったことや、今後自分が模擬授業を行



図2. Moodleを活用した授業省察

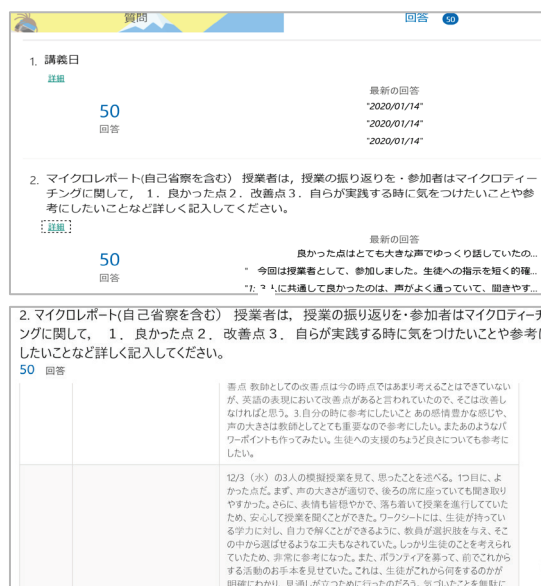


図3. Formsを活用した授業省察

う際の参考にしたいこと等が、詳しく述べられていた。また、学生の意見投稿に対して、活発な討論がなされているセクションも見られた。

4.2 Forms を活用した内省とフィードバックについて

Forms で送付された授業省察の自由記述には、友達の模擬授業に参加して参考になったことや、特に、自らはどのような授業を展開したいかという考えが具体的に述べられていた。マイクロ・ティーチング後の授業省察には、自身が実施した授業に関して詳細な内省が行われており、授業改善に向けた強い意欲が感じられる記述がなされていた。

4.3 AirDrop 等を活用したマイクロ・ティーチングの内省について

授業者の学生は、映像転送装置で送付されたマイクロ・ティーチングの様子を即座に視聴し、可視化された自分の発問や教室英語等を確認し、内省的考察を Forms で、送付した。

【模擬授業後の内省】

Forms や Moodle を通して送付された学生の授業省察の自由記述を、KJ 法を用いて分類した。以下の 6 観点が抽出された(以下、下線は著者による)。

<授業展開に関する気づき>

- ・ 授業で動画を見たときにとってもテンポよく進めていたのでこんな授業ができればいいなと思いましたが、実際にやってみると、私自身は、生徒が理解しやすいスピード、生徒の理解度、様子などに目を向けられていなかったように思う。今まで動画や講義などで様々なことを学んで上で模擬授業に取り組んだが、実際の授業はとても大変だった。
- ・ 授業展開を考える際には、細かい点にまでしっかり配慮することが必要であることを実感した。
- ・ その単元だけの授業を考えるのではなく、生徒が今まで習ってきたことを踏まえて、授業構成を考えていかなければならないと思った。

<指導案・板書・クラスルームイングリッシュ・評価等に関する気づき>

- ・ 指導案を作成し授業を実際にやってみて、評価と目標の一体化について、改めてその大切さが分かった。
- ・ 指導案を練るだけでなく、板書計画をしっかりと立てることも大切だと感じた。板書の仕方を練習しなければいけないと反省した。

<ピア・フィードバックに関して>

- ・ 自分では、なかなか気がつかない点を、いろいろアドバイスしてくれたので、とても参考になった。
- ・ 板書するときに、ずっと生徒に背中を向けたまままだと言われ、あらかじめ板書計画を立て練習してから模擬授業にのぞめばよかったと反省した。
- ・ 自分ではあまり上手くできたとは思っていなかったが、よかった点をいくつか教えてもらい、少し自信がついた。
- ・ ワークシートや板書について、改善点を指摘してくれたので、今後の参考にしたい。

<達成度に関して>

- ・ 試行錯誤の連続でなんとかマイクロ・ティーチングにこぎつけた。完ぺきとはいかないが、授業をやり遂げた達成感はしっかりと味わうことができた。
- ・ 多くの失敗はしたが、同時に沢山のことを学びとてもいい経験になった。
- ・ 講義で学んだことを生かして模擬授業をしたつもりだが、実際にやってみると計画どおりにはいかないこともあった。今回の反省を活かして、次はいい授業ができるように努力したい。
- ・ 模擬授業での反省点を、教育実習に生かしたい。自分ではもっと改善点があると思ったが、友達が良かった点などを教えてくれたので、少しだが自信がついた。

<授業展開に関する気づき>

- ・ 授業展開を考える際には、細かい点にまでしっかり配慮することが必要であることを実感した。
- ・ その単元だけの授業を考えるのではなく、生徒が今まで習ってきたことを踏まえて、授業構成を考えていかなければならないと思った。

<ICT 活用による自身の模擬授業省察>

- ・ 自分自身の模擬授業の様子を見ることは、最初は恥ずかしいと思ったが、観察することにより、・・・様々なことに気がついた。特に英語の発音についてもっと練習をする必要性を強く感じた。
- ・ 自分が実施した授業の様子をみて、声が小さく自信がないような話し方になっていることに気づいた。先生が提案してくれたように鏡の前で練習してみようと思う。生徒の前で、話すときはさらに緊張すると思うので、十分準備をして

のぞみたい。

- ・ 模擬授業の様子を観察し、今後の課題をつかむことはとても有効だと感じた。私は、クラスルームイングリッシュがあまり使えていないことが問題だと感じている。
- ・ 自分の実践ビデオを見て、次は細案を作り、それぞれの場面でどのようなクラスルームイングリッシュが必要か考えて、模擬授業に臨みたい。
- ・ 自分の実践ビデオを視聴し、改善点が多くあることに気づいた。
- ・ 自分の模擬授業の様子を見て、練習が必要だと痛感したし、クラスルームイングリッシュをもっと使いこなせるようになりたいと思った

5. まとめと今後の課題

本研究では、学生の授業改善への意欲向上を目指し、授業観察や模擬授業、特に授業省察過程におけるICTの効果的な活用を模索した。そして、ICTを活用した効果について、主として、Moodle やFormsの「学びの振り返り」の自由記述内容をもとに考察を行った。

Moodle の活用は、学生の主体的な意見交換を促し、他者の意見を聞きながら、自分の意見を再構築することに効果的であったことが示唆された。セッションによっては、学生の意見に対し、様々なディスカッションがなされていた。授業内では発言できなかった内容について、熱心なディスカッションがなされ、考えに深まりが見られることが読み取れた。また、授業者にとっては、マイクロ・ティーチング後の教員からの指導・助言やピア・フィードバックが、次回の授業実践への改善点を見出すことになったことも伺えた。

Forms の活用は、内省を促すことに有効であったことが示唆された。マイクロ・ティーチングに関して、模擬授業に参加した学生は、授業者の指導に対し、授業構成・発問の仕方・教室英語の使い方等様々なことに対する気づきが見られ、それらを内在化することが分かった(内省の自由記述における下線部参照)。授業者にとっては、試行錯誤を重ねながら授業の組み立てを考え実践したことが、達成感に繋がった(下線部参照)ことも、Forms を通して送付さ

れた自由記述から読み取れた。

最後に、映像による授業記録と送付は、振り返り活動を意識化させ、内省的考察を促すことに有効であることが示唆された(ICT 活用による自身の模擬授業省察の自由記述における下線部参照)。

しかしながら、本研究での ICT 利用に関しては、一つ課題を残す結果となった。それは、授業記録を送付する際に使用した映像転送装置に関することである。授業記録を送付する際、教師・大学側の機材と学生の所有する機材に互換性がない場合、映像記録を送付できないという問題が生じた。今後は、使用機材の互換性についても考慮する必要がある。

謝辞

本研究に対して、ご示唆をいただきました鳴門教育大学情報基盤センターの曾根直人准教授及び研究協力をいただいた皆様にお礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 生内裕子(2018) 教職履修学生の英語模擬授業の振り返りににおけるピア・フィードバックの影響、国際関係研究, 38(2), 29-37
- 柏崎秀子(2009) 省察できる教師を目指したメタ認知能力の育成の試み-模擬授業の設計と主体的な学びの過程の省察-, 実践女子大学文学部紀要, 51, 36-46
- 喜多容子(2019) AR を活用した初等中等外国語教育における授業観察の一考察-アクティブ・ラーニングと効果的なフィードバック-, 鳴門教育大学情報ジャーナル, 16, 17-20
- 藤村裕一(2016) アクティブ・ラーニング対応 わかる! 書ける! 授業改善のための学習指導案 教育実習・研究授業に役立つ, ジャムハウス
- Allen, D.W. (1966) Micro-Teaching--a New Framework for in-Service Education. *The High School Journal*, 49(8), 355-362
- Arsal, Z. (2014) Microteaching and pre-service teachers' sense of self-efficacy in teaching. *European Journal of Teacher Education*, 37(4), 453-464. doi: 10.1080/02619768.2014.912627